

## 武智秀夫 著 『軍医森鷗外のドイツ留学』

森鷗外は明治17年(1884)8月にドイツ留学に  
 出発し、明治21年(1888)9月に帰国した。留学の  
 目的は、陸軍医事制度調査と衛生学研修だった。

「私は鷗外の留学を医学史の立場で考証するこ  
 とにのめり込んだのである。これを始めてから  
 もう三十年以上も経過した」

と筆者は「あとがき」に記す。

整形外科学の専門医である筆者が鷗外の留学を  
 医学史の立場から研究しようと思立ったのは、  
 外科医・ビルロートの研究の途上で、ルード  
 ヴィヒII世とグッデンの不幸な死を知ったとき  
 だったという。

1886年6月13日、バイエルン国王・ルード  
 ヴィヒII世とその侍医で精神科医のグッデンが  
 シュタルンベルグ湖で謎の水死を遂げた。

筆者は侍医のグッデンを調査するうち、彼が神  
 経伝導路研究のパイオニアで当時の代表的な精神  
 科医であることを知った。さらにその頃、鷗外が  
 ミュンヘンに留学中であることに気がつき、鷗外  
 研究に邁進する契機になったようだ。

鷗外自身は、この水死事件後、五回もシュタル  
 ンベルグ湖を訪れている。よほど気にかかったの  
 だろう。帰国後、この出来事をモチーフにしてド  
 イツ三部作の一つ、『うたかたの記』を書いてい  
 るのは周知の事実である。

本書の特徴は、筆者が医者としての視点から、  
 鷗外が「軍医」としてどうドイツ留学に関わった  
 かを検証している点である。医者ならではの実証  
 的、科学的な観点が貫かれている。また、表が  
 65点、図(写真や地図、ノート、文献など)が85  
 点と図表が多いのも特徴の一つである。

鷗外にまつわるあらゆる研究書を渉猟した上  
 で、筆者自身が現地を見、原典に当たり、あるい  
 は、ドイツの研究者との地道なやり取りの中で得  
 た発見を本文に活かしている。同時に、それを図

表にしているのも、図表の内容は、単なる図や表  
 ではなく、情報と新資料の詰まった濃密な内容と  
 なっている。単に図表を追うだけで鷗外の東大時  
 代から帰国時までを経時的に辿れ、その時々の生  
 活ぶりや執務内容がリアルに想像できる。

ライプツヒヒから、ドレスデン、ミュンヘン、  
 ベルリンに至る鷗外の留學生生活を綴る部分は本書  
 ページ数の半分を占め、調査は微に入り、細にわ  
 たっていて本書の白眉となっている。

図表の一例をドレスデンの章で見してみる。表は  
 21から30にわたる。

以下、表の内容を列挙する。

表21 「(軍医) 講習会の時間割」

表22 「科目と教官」

表23 「ノートの内容」

表24 「製本されているノート」

表25 「衛生巡視一覧」

表26 「ロートとの交流」

表27 「軍医との交際」

表28 「日本人との会合」

表29 「ドレスデン滞在中に出席した講習会な  
 ど」

表30 「ドレスデン滞在中の観劇、音楽会など」

いずれも一目瞭然でわかりやすく、詳細であ  
 る。

鷗外はドレスデン留学中の1886年元旦に王宮  
 に参内した。

『独逸日記』には、「午後二時新正を賀せんが為  
 めに王宮に赴く」とある。この時の祝賀大謁見の  
 「通告」を筆者はザクセン州立中央公文書館から  
 入手し、その現物を図の47、48に呈示している。  
 旧字体のドイツ語で書かれた文書を筆者が翻訳し  
 て併記している。

鷗外は、元旦以外に1月13日、31日、2月10  
 日と四回にわたり参内し、1月11日には兵部大

臣ファブリス伯の夜会に招待されている。鷗外はそれぞれの会について、『独逸日記』に概要を記している。

しかし、こうした名誉な会への出席について、森家は全く知らず、鷗外も知らせていないことから、虚構ではないかという研究もある。

しかし、筆者は、

「私は収集した公文書から、『独逸日記』のこのことに関する記述はたとえ多少の誇張はあるにせよ、事実だと考えている」

と断じている。

本書では、随所で、「私は」と推論を含めた私見を大胆、かつ个性的に述べているのも特徴である。

たとえば、鷗外の大学卒業試験にまつわり――、

「私も卒業試験を受けてからもう六十年にもな

る。試問の問題を決めるために、宮島のおみくじの箱から竹棒を引かせる教授がいたのを思い出した」

また、いわゆるエリスとの結婚が反古になった理由に、彼女の「其源ノ清カラサル事」があったといわれている――。

「私は「勿論其源ノ清カラサル事」というのは、鷗外が一度誓った婚約を破棄したのを指していると考えている」

本書は医者目で見えた画期的な鷗外研究書であり、鷗外の留学から帰国にわたる人生を俯瞰して研究するには恰好の一冊である。

(山崎 光夫)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町335、TEL. 075(751)1781、2014年7月、A5判、352頁、3,000円+税]

渡邊洋子 著

## 『近代日本の女性専門職教育』

——生涯教育学から見た東京女子医科大学創立者・吉岡彌生——』

本書の構成は、序章：吉岡彌生研究の現代的意義、第1章：課題と方法、第2章：吉岡彌生としての医師世界とアイデンティティ、第3章：女子医学教育の構想と実践、第4章：「女医」像＝キャリアモデルの構築、第5章：ロールモデルとしての吉岡1——「女性医師の生き方モデル」の提起、第6章ロールモデルとしての吉岡2——リーダーシップから国策動員へ、終章：吉岡彌生と女性専門職教育—「生涯キャリア」への視座、特論：現代女性医師をめぐる課題と支援可能性、となっている。

本書の課題は『『女性参入型』専門職域における女性専門職論の成立基盤と構造を解明するとともに、女性専門職教育で提起された専門職像(ロールモデル)の機能と歴史的役割を吟味し、女性の『生涯キャリア』への今日的示唆を得るこ

と』とされている。そして、著者は、そのツールとして東京女子医科大学創立者吉岡彌生に着目し、その生涯をジェンダーおよびキャリアモデルという視点から分析する。

著者は、専門職領域における女性比率が飛躍的に高まっている現在においても、医師、弁護士といった「古典的専門職領域」における女性比率が低いのは、今なお女性が「他者の活動を支えする役回り」を多く担当することによると指摘する。そこに参入する女性は、さまざまなジェンダー秩序、ジェンダーバイアスにさらされており、いかに専門職アイデンティティを構築し、生涯にわたるキャリア設計、人生設計を展望できるのかは、まさに現代的な問題とする。

著者によれば明治以後、「女医」は男性を前提とする医師世界に「招かれざる」存在として参入